三昧証入

苦修三昧

「愚衲昔し廿三歳許りの時に一ぱら念仏三昧を修しぬ。身はせはしくなく事に従うも意は暫くも弥陀を捨てず。道歩めども道あるを覚えず、路傍に人あれども人あるを知らず。三千界中唯心眼の前に仏あるのみ。

一ら仏の相好を憶念し奉らんとするも、もろもろの妄想現前して或時は煩悶に耐えざるあり、然れども久しうしてついに妄想現を苦とするに足らざるに至りぬ。寤寐に唯仏の相好を観じて捨てざるに或は定中に妙相現ずるあり。ある時は仏の相好なく唯黒き相を見るあり。正念と妄念との闘争随分奮戦しば〳〵なり。いづれにしてもいかなる所までも修行敢為にあらざれば成じ難し。むかし宗教家の大偉人たちにおいても悉く困苦を窮めたるは、身体の修行よりは寧ろ精神に於て真理の光明を発見せんとの為に摧励したる苦は深かゝりしならん。一心に専ら念仏三昧によりて活ける真門に入るべし。」

と信解行証の道程にひたすら如来の慈愍をあおいで、一心不乱に念仏三昧を修行された。

明治十四年（二十三歳）吉祥寺宿舎では学徒いたづらに議論を戦わして騒々しい。田端の寺から通学し途上も専ら三昧に心を凝すに、ある時は「五大皆空唯有識大」の境界現前し、ただ下駄の音のみしている外、見聞の境を覚知し無くなったこともあり、また一心法界の真境現前した。

一心法界三昧

その時の境界を「予かつて華厳の法界観門によつて一心法界三昧を修す。行住坐臥常恒に観心止まず。或時は行くに天地万物の一切の現象は悉く一心法界の中に隠没し、宇宙を尽して唯一大観念のみなるを観ず。

また一日道灌山に禅坐して文殊般若をよみ、心如虚空無所住の文に至って、心虚空法界に周遍して、内に非ず、外に非ず、中間に非ず、法界一相の真理を会してのち、心常に法界に一にせるは是平生の心念とはなれり。

是れ即ち宗教の信仰に所謂光明遍照中の自己なり、大円鏡中の自己なりと信ず」

かくて明治十五年（一八八二）（二十四歳）この法界観を成就したので、「これで本堂ができた。本尊様を迎えねばならぬ」と念仏三昧を精進しつつ通学しておられた。

見仏三昧

「二十四の時に東京駒込の吉祥寺学林に於て卍山上人の五教章の聴講に列りし時、田端の東覚寺に寄宿して吉祥寺に通う往復にも、口に称名を唱え意に専

ら弥陀の聖容を想いもっぱら神を凝らしけるに、一旦蕩然として曠廓極りなきを覚え、その時に弥陀の霊相を感じ、慈悲の眸、丹華の唇等、その霊容を想うとき神心融液にして不可思議なるを感ず」

掌灯供仏

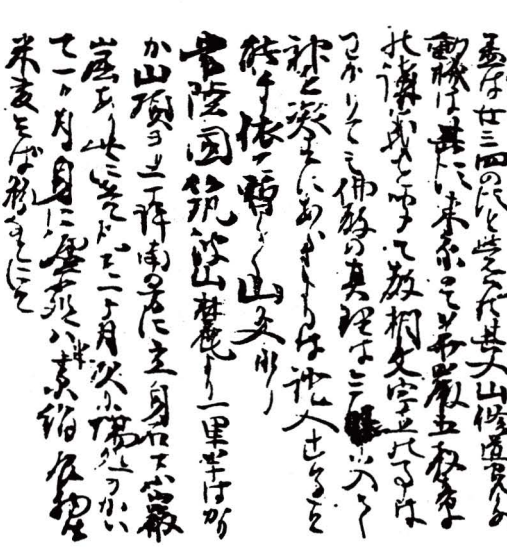
この年（十五年八月）東京より帰郷されて、鷲野谷医王寺の薬師堂に籠って三七日（日数に異説あり）の修行をされた。その間に蠟燭を腕に立てて燃えてしまうまで、また線香を横たえて終るまで、また掌に油を盛りこれに灯心を浸して火をつけ、掌の皺目がさけて熱した油と黄色の焔が皮膚の切れ目にヂリヂリヂリヂリにじみこむのを忍んで、如来宝前に供養し奉った。（その火傷のつづれは後年まで残っていた）

夜は裏の開山堂前に立って朝日の出るまで称名された。妹さんたちが食料を運ぶとこれをしりぞけられた。

断食参籠

筑波入山

その後直ぐ（明治十五年（一八八二）（二十四歳）八月末）筑波山で二ヶ月間念仏三昧を修行された。



「蓋は廿三四の頃と覚へ候　其入山修道せんとの動機は　其頃東京にて華厳五教章の講義を聞て教相文字上の事はわかりても　仏教の真理は三昧に入て　神を凝らすにあらざるよりは　証入すること能はず　依て暫らく山に入れり

常陸国筑波山麓より一里半ばかりか山頂より二丁許南の方に　立身石という巌窟あり　此に在って凡そ一ヶ月　次に場所をかえて一ヶ月　身に纏う所は半素絹　食物は米麦そば粉などにて」

（次の場所は北斗石と伝うる人あり決して確ならず）

真空に偏せず妙有に執せず、中道にあって円かに照す智慧の光と慈愛の熱とあって、真善微妙の霊天地にたましいを栖まし遊ばす」に還念の如来三力加被をたれたもうところ心の扉すなわち開けて、無辺際の浄土に、無量寿如来了々と現前し給う。

「聖きしめしをこうむりて心の知見は開けたり、報仏不思議の境なる華蔵世界はあらわれぬ。金銀瑠璃摩尼荘厳の照り輝くことはみなし。

阿弥陀無量光王尊

身色金山王のごと相好円満し給いて六十万億河沙由旬。

有無を離れし中道に慧光大悲に輝けり。

筑波山立身石巌窟

塵々法界照り合いて功徳荘厳きわもなし。」

此の念仏三昧円かな成就の時の偈に

「弥陀身心遍法界　　衆生念仏仏還念

一心専念能所亡　　果満覚王独了々」

この修行中、筑波山上では昼は窟の中で念仏、夜は巖の上で礼拝されていた。只管打座(しかんたざ)していると四辺に音なく山全体が我が体のようになることもあった。

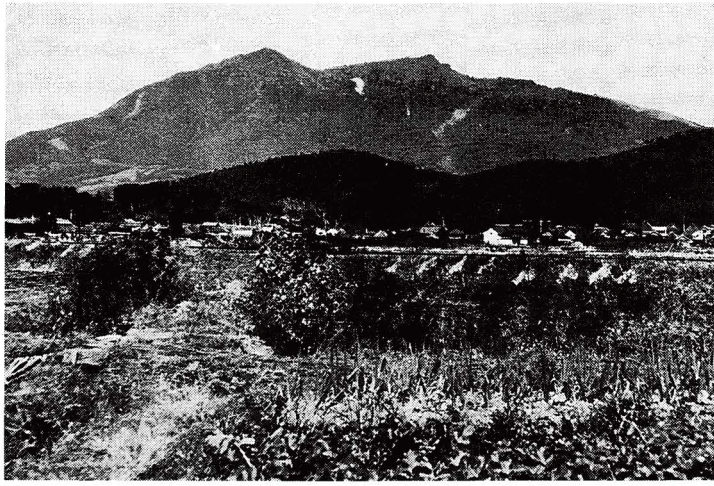
一日十万称

一日の称名およそ十万遍。時には蛇が膝の上に悠々と這い上るので、法衣の袖であやしてやるに、別に驚きもせず、たまには猿がきて無心に戯るることもあった。

山上には昼登山の人に茶をだして、夜は山を下る茶店があって、そこの人が親切に世話してくれた。多くは少量のそば粉で飢をしのいだ。

親鸞聖人餓鬼化導の跡と伝えらるる立身石の岩屋に一ヶ月籠ったのち、この山には係がおって、もっと長く居るにはまた届けなおさねばならぬので他の場所にうつられた。

これは夢ではあるが、まだ立身石の所にいる時に初め金竜現われ、遠くに文殊普賢二菩薩獅

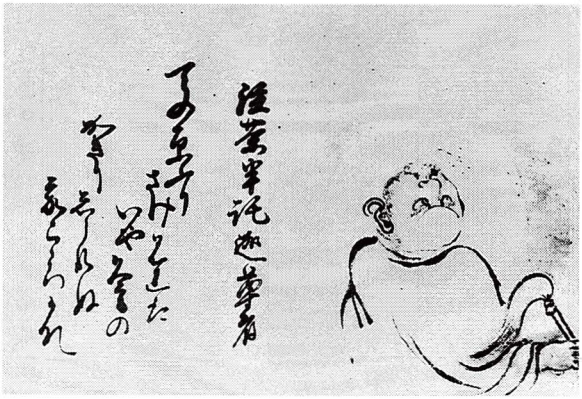


筑　波　山

子と象に乗り、釈尊がその間にたって在(ましま)す三尊を夢みられたこともあった。また山を下る前夜には曠野で獣に追われて逃げると不思議にも空を飛べて、向うの経蔵に経がほしてある所にきた。そこで一度一切経を披閲(ひえつ)せんと、願っていた望の遂げらるるのを喜んだ夢を見られたこともあった。ある時は容貌魁偉な剣客と号する人がきて、胆力養成をしているが、まだあなたのような度胸が定らぬから教えを乞いたいという人もおった。

初め登山の時一円五十銭所持していたのを村の戸長に届ける時預けて登ったところ、なかなか下山せぬので、戸長が心配して注意を鷲野谷の実家に与えた。

下山帰寺の道中、ある寺院に宿を乞うけれども、体は痩せ顔は垢つき、茫々と髪はのびた貌（かお）を変に思ったか、中々きかぬ。無理にも願って本堂の隅にねかしてもらったが、群る蚊が容赦なく五体に結縁してくれる。下山の時はもちろん、その後でもあう人はその憔悴（しょうすい）した面貌に随分いたいたしさを感じた。

下山の途次、松戸まできてかねて懇意な家に立ちよられた。汚れた肌着に虱がうようよしている。家人は見かねて衣類をかえて上げ、熱湯をかけてその虱を殺そうとするので、

上人「そのまま裏口にほしておいて下されば、虱はてんでに好きな方にいってしまいます。」